

## 「福井県遺跡速報 2024」のみどころ

福井県教育庁埋蔵文化財調査センターは、文化財保護法にもとづく埋蔵文化財保護行政の一環として、県内各地で発掘調査を行い、調査成果を『福井県埋蔵文化財調査報告』として毎年刊行しています。

本年においても、3 月に 5 つの遺跡の調査報告書を刊行しました。その成果のなかで、多くの調査成果があがった3遺跡(糞置遺跡・南稻越遺跡・福井城跡)にスポットをあて、重要な結果や新たな発見を、「福井県遺跡速報 2024」として、このたび展示いたします。

それぞれの遺跡について、展示資料のみどころを下記にご紹介いたします。

### 1 糞置(くそおき)遺跡 —多くの新発見があった福井平野の代表的遺跡—

北陸新幹線建設に伴い、平成 28(2016)年度・平成 29(2017)年度にかけて発掘調査がおこなわれました。

調査の結果、縄文時代晩期にさかのぼる河川、弥生時代から古墳時代にかけての建物跡、墓、奈良時代から平安時代にかけての建物、溝、河川を発掘することができました。これらからは多くの土器、木器、石器が出土しました。

#### ◆ 糞置遺跡 展示品のみどころ

##### ① 縄文時代晩期の土器や土偶

北陸における縄文時代から弥生時代への移り変わりを示す、重要な資料です。今回の調査で、「壺(つぼ)」や「甕(かめ)」などといった「糞置式」とも呼ばれる縄文時代晩期の土器が多く出土しました。研究の発展が期待されます。また、同じ時期の土偶もみつかりました。

##### ② 弥生時代から古墳時代にかけての多様な木器

農具・工具などの多様な生活用具、そしてマツリの道具が出土しました。なかでも、板に刻まれた「弧帯文(こたいもん)」は、弥生時代後期の吉備地方の王の墓で、古墳時代のさきがけとなった楯築墳丘墓(たてつきふんきゅうぼ:岡山県倉敷市)の資料と共通し、必見です。

##### ③ 奈良時代から平安時代の「東大寺領糞置荘」に関連する墨書土器

奈良時代から平安時代の溝や河川からは多くの須恵器(窯で焼いた陶器)が出土し、その中には、文字が記されたものが多くみつかりました。文字は、当時の食器(坏・盤・椀)の底部外面などに、筆で墨書きされています。

「浄」「西」「佐々尾寺」など、さまざまな文字が記されています。なかでも、「佐々尾寺」は、正

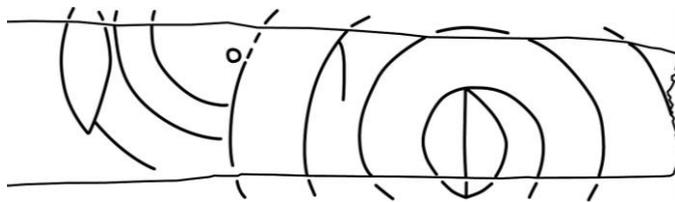
倉院宝物の越前国足羽郡糞置村開田地図(天平神護二年:766)で本調査区の西側に描かれている「佐々尾山」に関連する資料であり、絵図(古地図)資料と考古資料とをつなぐ、大きな発見です。



表

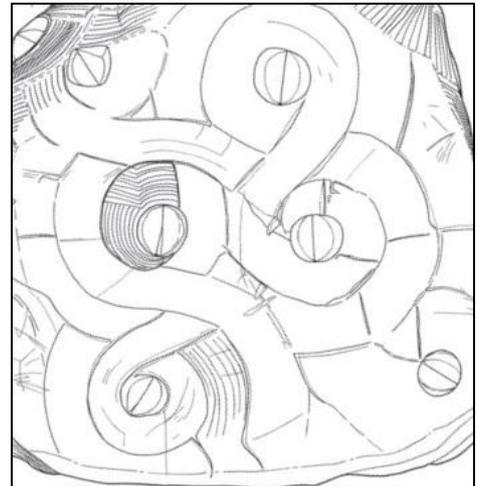


裏 ① 縄文時代晩期の土偶



文様復元図

② 弧帯文が刻まれた板(弥生時代後期～古墳時代前期)



参考: 岡山県倉敷市楯築遺跡弧帯石(弥生後期)  
(図の出典: 『楯築弥生墳丘墓』 岡山大学文明動態学研究所・岡山大学考古学研究室) ※②とは縮尺不同



佐々尾寺

③ 「佐々尾寺」と墨書された須恵器



参考: 越前国足羽郡糞置村開田地図 (正倉院宝物中倉 14)  
(『福井県史』資料編 16 上より一部抜粋)

## 2 南稻越(みなみいなごえ)遺跡 —新幹線の地下からみつかった古墳時代のはじまり—

北陸新幹線建設に伴い、平成 27・28(2016・2017)年度と平成 30(2018)年度に発掘調査がおこなわれました。

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての建物跡や土坑、河川、平安時代ごろの建物や井戸などがみつかりました。これらからは多くの土器、石器が出土しました。

### ◆ 南稻越遺跡 展示品のみどころ

#### ① 弥生時代から古墳時代にかけての移り変わりを示す土器や鏡形土製品

越前北部における弥生時代から古墳時代への移り変わりを示す資料です。この中には、遠く離れた近畿地方や山陰地方から、技術や情報が、古墳時代の到来とともに伝わってきたことを示す土器が含まれており、今後の研究に大きく役立つものだと言えます。

青銅(ブロンズ)製の鏡の形をうつした土製品もみつかりました。デフォルメされておりはっきりしませんが、古墳時代初頭ごろに日本でつくられた鏡(倭鏡)がモデルの可能性もあります。また外縁は鋸歯状で放射状の線が刻まれます。この部分は銅釧を模倣したことが考えられます。

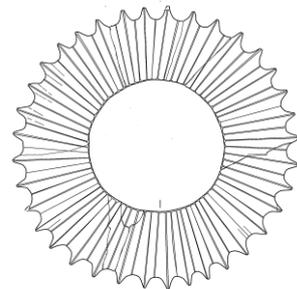
#### ② 玉作り・赤色顔料精製に関連する石製品

また、福井・石川両県の境にある加越山地一円から産出する緑色凝灰岩を石材とした玉作の各工程に関連する出土品もみつかりました。その中には、施溝分割という技法を用いたものもあり、注目されます。

L 字形石杵と呼ばれる、赤色顔料(水銀朱)を細かく砕くために使われた石製品も出土しました。福井県では3例目で、弥生時代後期から終末にかけて西日本一円で共有された祭祀形態が日本海側にも及んでいたことを裏付ける、貴重な発見です。



① 鏡形(釧形)土製品(弥生時代末～古墳時代初)



参考：京都府城陽市芝ヶ原古墳出土青銅鏡・釧  
(図面の出典：城陽市埋蔵文化財調査報告書第 68 集)

※①とは縮尺不同



② L字形石杵(弥生時代末～古墳時代初)



参考:石杵の使用方法

(図の出典:「朱の道を探る」津市埋蔵文化財センター情報『まいぶん津』第15号)

### 3 福井城跡(ふくいじょうあと) —明らかになった江戸時代の武家のくらし—

北陸新幹線建設に伴い、平成 28(2016)年度・平成 29(2017)年度にかけて発掘調査がおこなわれました。

調査の結果、石垣や道路、屋敷境の溝で区切られた武家屋敷と、それに伴う建物や井戸、廃棄土坑などがみつけられました。これらからは多くの土器・陶磁器、木製品や石製品、金属製品などが出土しました。

#### ◆ 福井城跡 展示品のみどころ

##### ① 唐津焼の大鉢

口径 43 cmを測る大型品で、内面に鉄釉と銅緑釉で草花文を描いています。

結城秀康(ゆうきひでやす)の養父、結城晴朝(ゆうきはるとも:1534-1614)と考えられる屋敷から出土しました。このような大鉢は珍しく、希少的価値が高かったものと思われます。

##### ② 織部焼の向付

変形させた角皿の内面に梅の花と枝を描いています。結城秀康の妻の弟、水戸三七と考えられる屋敷の園池から出土しました。上級武士の茶会の様子を物語る資料です。

##### ③ 墨書土師質皿

屋敷境の溝からまとまって出土しました。皿の裏面に墨で複数名の人の名前を書いています。儀式に用いられたものでしょうか。

また、地鎮に用いた土師質皿もみつけられました。上に被せた方には裏面に「上」の文字、下にあった方には表面に墨で文様が書かれています。



① 唐津焼大鉢(江戸時代初め)



② 織部焼向付(江戸時代)



かくしん様  
せうし



連(札)ん長様

人名と考えられる墨書



地鎮用と考えられる墨書(下側)

③ 墨書土師質皿(江戸時代)